



漂流民コミュニケーション研究家の友人がメールで、沖縄県糸満市の大度海岸に建立された「ジョン万次郎上陸之碑」の写真と記事(2月19日沖縄タイムズ)を送っていただきました。日本を目指して足を踏み出した若い日の姿です。ジョン万次郎(1827-1898)の直系5代目で、玄孫になる若い美しい女性も写真に写っていました。友人はこの碑の除幕式に参列されました。

日本人でジョン万次郎の名前を知らない人はいませんが、私は名前以外にはほとんど知りませんでした。さっそく、津本陽著「歴史長編小説 花水木と椿」、井伏鱒二著「ジョン万次郎漂流記」、中浜博著「私のジョン万次郎」を読みました。万次郎の胆力、人情味、賢さに圧倒されました。

糸満市の大度海岸は、土佐の漁師の万次郎が14歳で遭難し、漂流の後、10年の歳月を経て、1851年にやっとたどり着いた、日本の地です。漂流し、アメリカの捕鯨船ホイットフィールド船長に救助され、捕鯨を学びながら、アメリカに渡りました。船長に深く感化を受け、10年間で大きく変わりました。「なぜ、沖縄に上陸したか」は、渡航者を問答無用で拒否する、あるいは打ち首にする、キリシタンを邪教とする当時の幕府の管轄下にある本土より、琉球では人々が優しく受け入れることを知っている当時の世界の情報に従ったものでした。

帰国した万次郎は長期間拘束され、取り調べを受け、キリシタンの詮議をされ、踏み絵も踏みました。万次郎はユニテリアン教会の信徒でしたので、磔刑のイエス像、聖母マリア像には何の関心もありませんでした。万次郎たちの海外の情報は聞き取りを受け、記録され、開国を模索する人々の関心を集めました。やがて、ペリー提督が和親を求めて来航したため、交渉が必要な幕府は英語を話す万次郎を呼び寄せ、土分に取り立て、協力させました。万次郎は当時の日本人には及びもつかないほど、英語・数学・測量・航海術・造船技術を学んでいたからでした。問われて万次郎が、大統領は選挙で選ばれ、任期は4年ごとに見直される(民主主義)、誰でも勉強し、どこにでも行ける(自由・平等)、男女はカップルとして活動する(男女平等)、と正直に答えても驚くばかりです。鉄道、電信など、理解を超えることだったでしょう。もとは漁師の身分だと蔑み、さらに、見知らぬ外国を恐れ、疑心暗鬼になった人々は、万次郎を信用することができなくても、利用するだけ利用し、冷遇したのです。万次郎にしてみれば、アメリカに伍して生きていくために、アメリカを知り、日本人の生き方、考え方を見直し、一人の人間として大切に扱われるべきだという思いを伝えたかったのでしょう。

明治政府の富国強兵の方針に沿って、万次郎は英語はもとより、航海術、造船技術、捕鯨を熱心に教え、伝えました。幕府も新政府も、支配階級の人々は立身出世し、権力を得、金持ちになるために、知識、技術を熱心に学びましたが、哲学、文化には関心を持ちませんでした。万次郎はそういう人々に取り入ろうとする気は全くありません。弱く貧しい人を助け、共に生きる「良きサマリヤ人」であったホイットフィールド船長が理想の人物であり、万次郎もそのように生きたいと願ったのです。

万次郎の曾孫にあたる中浜博氏は、「1945年の日本の敗戦によって、100年前に万次郎が伝えた民主主義がやっと日本に入った」と記しておられます。万次郎はホイットフィールドを終生敬愛し、その想いはつながり、両家の交流は5代目まで続いています。万次郎の優しさからくる正義感、潔さ、一身を投げ打っても困難に向き合う勇氣は、「いごっそう」(土佐男児)なのでしょう。